TADOKU JUNIOR　アンデルセン童話　★★★☆☆ ふつう　413語

The Real Princess

えんどう豆の上のお姫さま

Hans Christian Andersen (tr. H. P. Paull et al.)（1846年の本）　原文そのまま　朗読：Bob Neufeld

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　本物のお姫さまをさがす王子のもとに、あらしの夜、ずぶぬれのお姫さまがやって来ます。お后さまがベッドにしかけたひみつとは……。



There was once a Prince who wished to marry a Princess; but then she must be a real Princess. He travelled all over the world in hopes of finding such a lady; but there was always something wrong. Princesses he found in plenty; but whether they were real Princesses it was impossible for him to decide, for now one thing, now another, seemed to him not quite right about the ladies. At last he returned to his palace quite cast down, because he wished so much to have a real Princess for his wife.

One evening a fearful tempest arose, it thundered and lightened, and the rain poured down from the sky in torrents: besides, it was as dark as pitch. All at once there was heard a violent knocking at the door, and the old King, the Prince's father, went out himself to open it.

It was a Princess who was standing outside the door. What with the rain and the wind, she was in a sad condition; the water trickled down from her hair, and her clothes clung to her body. She said she was a real Princess.

“Ah! we shall soon see that!” thought the old Queen-mother; however, she said not a word of what she was going to do; but went quietly into the bedroom, took all the bed-clothes off the bed, and put three little peas on the bedstead. She then laid twenty mattresses one upon another over the three peas, and put twenty feather beds over the mattresses.

Upon this bed the Princess was to pass the night.

The next morning she was asked how she had slept. “Oh, very badly indeed!” she replied. “I have scarcely closed my eyes the whole night through. I do not know what was in my bed, but I had something hard under me, and am all over black and blue. It has hurt me so much!”

Now it was plain that the lady must be a real Princess, since she had been able to feel the three little peas through the twenty mattresses and twenty feather beds. None but a real Princess could have had such a delicate sense of feeling.

The Prince accordingly made her his wife; being now convinced that he had found a real Princess. The three peas were however put into the cabinet of curiosities, where they are still to be seen, provided they are not lost.

Wasn't this a lady of real delicacy?

むかし、お姫さまと結婚したいと思っている王子がいました。でも、そのお姫さまは本物のお姫さまでなければなりません。王子はそんなお姫さまを見つけようと、世界じゅうを旅してまわりました。けれども、いつもどこかがおかしいのです。お姫さまなら、いくらでも見つかりました。でも、本物のお姫さまかどうかは、どうしても見分けがつきませんでした。あるときはこれ、あるときはあれと、どうもしっくりこないところがあったのです。とうとう王子は、すっかりしょんぼりして宮殿に帰ってきました。本物のお姫さまをおよめさんにしたくてたまらなかったからです。

ある晩、おそろしいあらしになりました。かみなりが鳴り、いなずまが光り、雨は空から滝のようにふってきました。そのうえ、あたりはまっ暗でした。とつぜん、戸をはげしくたたく音がしました。王子のお父さんの年とった王さまが、自分で戸をあけに出ていきました。

戸の外に立っていたのは、一人のお姫さまでした。雨と風のせいで、お姫さまはひどいありさまでした。髪の毛からは水がしたたり、服は体にぴったりはりついていました。お姫さまは、自分は本物のお姫さまだと言いました。

「まあ、それはすぐにわかりますよ！」と年とったお后さまは思いました。けれども、これから何をするかは一言も言わずに、そっと寝室へ行くと、ベッドのふとんを全部取りのけて、寝台の上に小さなえんどう豆を3つぶおきました。それから、その3つぶの豆の上に、しきぶとんを20まい重ね、さらにその上に羽ぶとんを20まい重ねました。

このベッドで、お姫さまは一晩ねむることになりました。

次の朝、お姫さまは「よくねむれましたか」とたずねられました。「いいえ、それがとてもひどくて！」とお姫さまは答えました。「一晩じゅう、ほとんど目をつぶれませんでした。ベッドに何が入っていたのかわかりませんが、何かかたい物が下にあって、体じゅうあざだらけです。とても痛かったのです！」

これで、この方が本物のお姫さまだということがはっきりしました。20まいのしきぶとんと20まいの羽ぶとんごしに、3つぶの小さな豆を感じることができたのですから。本物のお姫さまでなければ、こんなにびんかんな感じ方はできません。

そこで王子は、とうとう本物のお姫さまを見つけたと確信して、この方をおよめさんにしました。そして3つぶの豆は、めずらしい品をならべる宝物部屋に入れられました。なくなっていなければ、今でも見ることができますよ。

どうです、これこそ本当にびんかんなお姫さまではありませんか？

たんご と クイズ　えんどう豆の上のお姫さま

Princess お姫さま	**tempest** あらし	**peas** えんどう豆
mattresses しきぶとん（マットレス）	**feather beds** 羽ぶとん	**black and blue** あざだらけ

Q1 お后さまは、ベッドに何をおいた？

① 小さな石　② かたいパン　③ 3つぶのえんどう豆

Q2 豆の上には、しきぶとんを何まい重ねた？

① 20まい　② 3まい　③ 100まい

Q3 どうして本物のお姫さまだとわかったの？

① りっぱな服を着ていたから　② たくさんのふとんごしに豆を感じたから

③ 王子の顔を知っていたから

こたえ

Q1 ③ お后さまはだれにも言わずに寝室へ行き、寝台の上に小さなえんどう豆を3つぶおきました。

Q2 ① お后さまは、3つぶの豆の上にしきぶとんを20まい、さらにその上に羽ぶとんを20まい重ねました。

Q3 ② 40まいのふとんの下の小さな豆を感じて、体じゅうあざだらけになったので、本物だとわかりました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #1597（Hans Christian Andersen (tr. H. P. Paull et al.)、1846年）。パブリックドメイン。

挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。

朗読（Web版）：Bob Neufeld（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）

和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。